

湛水ポットによヤマドリヤシの栽培試験

野村 哲也

緒言

観葉植物の鉢生産では、灌水に多くの労働力を要する。自動灌水による省力化も行われているが、必ずしも良い結果は得られていない。そこで最近開発された湛水ポットを用い、植物の生長に及ぼす影響と灌水作業省力化の可能性を検討した。

材料と方法

実験は、温泉熱利用ガラス温室内で、平成2年5月から3年2月まで行った。試験区は湛水区（水槽の水が完全に乾いてから給水）、間欠区（水槽の水が半分が乾いてから給水）と慣用の鉢を対照区とした。

ヤマドリヤシの植付時の大きさが平均で草丈43.7cm、幹径0.88cm、葉数5.3枚、根長23.2cm、全体重15.2gのものを、1鉢当り3本植えとした。

調査は、植付け約9ヶ月後に、生育の各形質および樹姿について行った。

結果及び考察

調査の結果を第1表に示した。草丈の最も大きいのは慣行区であるが少し徒長気味であった。葉色は慣行区のものが1番劣り、樹姿は間欠区で最も良く、次いで湛水区、慣行区で最も劣った（写真1）。

夏場の灌水の回数では、慣行区がほぼ毎日であったのに対して、間欠区では4日に1回、湛水区では6日に1回の灌水であった。植物の生長には、湛水だからといってなんら影響も見られず、この湛水ポットを用いる事により、少ない灌水労力で栽培が可能となる。

今回はヤマドリヤシのみの栽培試験であったので、次回は他の植物を用いて湛水ポットを利用した栽培試験を行いたいと思う。

要約

ヤマドリヤシを供して、慣用の10鉢を対照に、湛水及び間欠灌水を行い、栽培試験を行った。間欠灌水法が生長、樹姿ともに最も優れ、次いで湛水灌水法であり、慣行の灌水法に比べて灌水労力は、間欠法で1/4、湛水法で1/6位であり、灌水の省力化が可能であった。

第1表 ヤマドリヤシの試験区別生育調査

	草 丈	草 高	分けつ	葉 数	黄 葉	樹 姿
	cm	cm	本	枚	枚	
間欠区	111.0	86.0	1.0	2.4	0.5	4.6
+-	15.3	1.4	0.4	0.9	0.4	0.5
湛水区	96.8	130.1	0.4	2.9	0.8	4.2
+-	8.8	5.5	0.4	1.0	0.6	0.8
対照区	115.0	104.3	0.6	4.0	1.1	2.6
+-	16.1	26.1	0.3	0.7	0.3	0.5

樹姿 1：最も観賞価値が劣る，3：中間，5：最も優れる



写真1. 左より対照区，湛水区，間欠区，